

# 学位論文要旨

学位論文題目 武田泰淳中国小説研究—中国語・英語・草稿資料を手掛かりに—

申請者氏名 孫森

桶谷秀昭の武田泰淳中国小説に関する分類を参考にすれば、これまでの武田の中国小説に関する先行研究における問題点は、「武田泰淳の中国体験を素材にした」中国小説に関する論考は盛んであるのに対して、「中国近代史上の革命家の姿を史実に即しながら描いたもの」、「中国古典に素材を取り氏の奔放な想像を駆使した物語」というほかの二種類の中国小説に関する研究に検討されていない作品が多く残されているという点である。

したがって、本論文は、主に「中国体験を素材にした」中国小説を論述してきたという従来の研究状況を改善するため、「中国体験を素材にした」小説以外の中国小説を積極的に研究の対象とする。具体的には、「揚州の老虎」、「水の楽しみ」、「流沙」、「王者と異族の美姫たち」という四篇の中国小説である。この四篇の中国小説を取り上げる理由は次の2点にある。ひとつはこの四篇の中国小説はいずれも武田にとって重要な作品である点にある。もうひとつはこの四篇の中国小説は関連する先行論が少なく、ほとんど検討されていない未開拓の中国小説である点にある。

以上の点に基づいて、以下の二つの目的を達成したい。一つ目は「揚州の老虎」、「水の楽しみ」、「流沙」という三篇の中国小説の典拠を指摘し、小説と典拠との比較を行ったうえで、典拠の利用法を明らかにし、さらに変更・付加の内容を通して武田の独創性を検討したい。二つ目は日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」における小説「王者と異族の美姫たち」の未発表草稿類資料「原稿 天命」（資料番号 TD056535）などを考察対象として取り上げ、草稿と初出本文との異同を検討しテキストの生成過程を分析した上で、改稿の時代背景から武田の「気持」を理解し、具体的に武田が「悠久なものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」（中国古典）の「現代」的意義を検討したい。

各章の論述を通して先行研究における問題点の解決に取り組んだ。第一章では、『辛亥革命江蘇地区史料』が小説「揚州の老虎」の典拠であることを突き止め、具体的なテキスト間の相互関係を明らかにした。そのうえで、小説全体にわたる典拠の利用方法を以下のようにまとめた。小説は大部分が『史料』の「揚州分府」を典拠とし、一部分が『史料』の「分区部分」の「鎮江府」にある「鎮江光復史料」、「三益棧与李竟成」などをもとにして作られた。武田は「揚州の老虎」の創作にあたり、実体験者の回想録・インタビュー記録と研究者の調査報告書を比較しながら摂取し、研究者の「附録：孫天生起義調査記」よりも辛亥革命の実体験者の回想録・インタビュー記録を優先して取り込んだ。さらに、「揚州の老虎」において付加された「わたしたちがそれを動かせばいいのだ」、繰り返された「揚湯止沸の計」など言葉によって、商人たちを

世の中を「動かすもの」として描く「揚州の老虎」の独創性を明確化した。

第二章では、『珂雪齋集』が「明朝滅亡」題材小説「水の楽しみ」の典拠であることを指摘した。小説と比較した上で、小説全体にわたる典拠の利用方法を次のようにまとめた。小説は武田が主に『珂雪齋集』の「書王伊輔事」、「遠帆楼記」、「東遊記二十二」、「游居柿録卷之十二」、「行路難」、「趙大司馬伝略」、「珂雪齋游居柿録卷之八」、「柳浪湖記」、「珂雪齋游居柿録卷之一」に拠り、『珂雪齋集』から材料を採って組み合わせたものであることがわかる。また、武田が典拠の記述の順序を入れ替えたり、複数箇所を適宜まとめたり、簡略化したりして「水の楽しみ」を作ったことを明らかにした。小説「水の楽しみ」はほとんどの部分が典拠である『珂雪齋集』を翻訳（直訳、意識を含む）したものであることを明らかにした。さらに、武田の独創性は、付加したつなぐ段落により袁小修の舟遊びの趣が明末の時代背景、家族の盛衰、自然環境の変化としっかりつながるようになったことにあると結論付けた。

第三章では武田と敦煌との関係を切口として、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」の中の未発表資料を参考にして、武田文学における唯一の敦煌題材小説「流沙」の典拠資料を整理し武田の英語力を確認した上で、典拠と小説との比較を行い、「節ごと」、「全体」という二つの方面から武田泰淳の言う「換骨奪胎」の方法（典拠の利用法）を次のようにまとめた。節ごとで腑分けすると、作品構成は一部を除き、大体典拠としての **Ruins**、**Serindia**、『回教概論』の構成順にしたがっていることを明らかにした。全体からみれば、「流沙」は体系的な **Serindia** より、自然風景・面白いエピソードが豊富な **Ruins** のほうが多く取り入れられ、典拠の文字のみならず、写真も「流沙」においてよく使われていることを析出した。また、変更の内容により、武田の独創性は登場人物蔣が現実主義者に変貌され、シンが典拠におけるシク教徒から「熱烈な回教徒」に変貌されていることにあると解明した。

第四章では日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」における未発表の草稿類資料「原稿 天命」（資料番号 **TD056535**）などを考察対象として取り上げ、草稿と初出本文との異同を検討することによって、「聖王」「悪王」像が明確化され、美姫たちが格上げされ、「幸福な重耳」と「天命」が削除されたというテキストの生成過程を明らかにした。また、小説の生成過程の分析を踏まえつつ、改稿の時代背景から、具体的に武田が「悠久なものがなぜほしかったか」、即ち本小説における「悠久のもの」（中国古典）の「現代」的意義を検討した。本小説において「悠久のもの」の「現代」的意義は、動乱の**1960**年代に面して、武田が「現実のきびしさを考える場合に」、「悠久のもの」から「よりどころとなり得るもの」である「徳」あるいは「王者（徳の高い人）」を追究し、「武力と悪知恵ではなくて、徳によっておさめられる静かな国」を強調して、中国古典を通して「現代」の難題を問い直したことであると思われる。

本研究により、ささやかながらこれまでの武田泰淳の中国小説の研究を更新し、日中の文学・文化交流研究分野に貢献できると思われる。

本論文にて得られた知見を基に、今後より多くの「中国体験を素材にした作品」以外の中国小説を視野に入れて考察したい。研究を進めるべき具体的な課題について以下に示す。まず中国小説の典拠研究について、小野忍の提示した小説「霞客」の典拠を踏まえて、武田泰淳の大切にした小説「霞客」を検討したい。また、文末に「燕京学報専号之十『吳憲齊先生年譜』によるところ多し」という注記がある「玉璜伝」(『中国文学』第 81 号、1942) なども考察の対象になる。次に中国小説の草稿研究に関して、小説「才子佳人」(『人間』1946 年 7 月号) の戦争下に書きためられた草稿「貞女」(資料番号 T0056438、34 枚)、小説「会へ行く路」の初稿(資料番号 T0056437、22 枚) などがまだ検討されていない。

## 学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 166 号	氏 名	孫 森
論文題目	武田泰淳中国小説研究 —中国語・英語・草稿資料を手掛かりに—		

## (論文審査概要)

## 学位論文の概要

序章では研究課題を説明している。小説家武田泰淳には中国に題材をとった作品が多くあり、中国古典文学との比較や時代背景との関係についての研究はすでになされている。しかしながら典拠となった資料および草稿段階との比較検討はいまだ十分ではないとする。そこで武田のいくつかの作品を取り上げ、典拠となった中国語・英語資料との比較検討を通して研究史を更新すること、および「武田泰淳コレクション」に収蔵されている草稿類の分析によって小説としての生成過程を検討し、これまで明かされていない武田の意図を読み取ることが課題だとする。

第1章「武田泰淳『揚州の老虎』の典拠と方法—『動かすもの』としての商人たち—」では、辛亥革命に題材をとった『揚州の老虎』について、1961年刊行の『辛亥革命江蘇地区史料』が典拠であることを突き止めた。あわせて体験者の回想録やインタビュー記録などを取り込んでいることも解明した。そのうえでそれら典拠と比較することで、商人が変革期に果たした能動的な役割に注目したことに武田の独創性を見いだせるとしている。

第2章「武田泰淳『水の楽しみ』の典拠と方法」では、明朝滅亡を素材にした『水の楽しみ』の典拠資料が、『珂雪齋近集』であることを明らかにした。そのうえでどの部分を取り上げ、また構成を入れ替えて小説化したのかを検討するとともに、あらたに付加した箇所から、明末の社会状況などが浮き彫りにされていると主張する。

第3章「武田泰淳『流沙』の典拠と方法」では、西域敦煌に題材をとった『流沙』と、典拠とする20世紀初めの探検家スタインの Serindia, Ruins との比較検討を行っている。そして登場人物の性格や信仰などを「換骨奪胎する」という手法によって、西洋目線ではなくアジアからみた作品に仕上げていると評価している。

第4章「武田泰淳『王者と異族の美姫たち』論—草稿類資料を手掛かりに—」では、『史記』に題材をとった『王者と異族の美姫たち』について、日本近代文学館蔵の未発表草稿を分析することで、小説としての生成過程を分析した。そして東西冷戦下1960年代のなかで、「悠久のもの」として中国古典に価値を見いだそうとしたと評している。

終章では、1～4章の結論それぞれの内容を再度確認したうえで、広い分野に素材を取った小説家としての特徴が浮き彫りになったとする。

## 1. 創造性

近代の小説家武田泰淳については、これまで武田自身の中国体験との関係で作品評がなされてきた。それに対して、中国近代の革命家の姿に即したものの、あるいは中国古典に題材をとった作品群に注目している。そのうえで、原典に加えた箇所を明確にすることで武田の創作意図を読み取る、および作品の生成過程を再現し草稿段階からの加筆箇所を注目することで意図を明確にするといった手法によって、武田作品についてのあらたな論点を抽出できている、当該研究テーマへの貢献は明確だと評価しうる。したがって創造性については達成できている。

## 2. 論理性

これまで典拠研究がなされてこなかった武田作品を取り上げ、小説と原典との異動を詳細に検討のうえ、あらたに付加した内容とを厳密に腑分けする、あるいは武田が原点から抽出した箇所

を確定する。同様に草稿との比較についても、作品としての生成過程を丁寧に再現することで、武田の意図をより明確にしようとしている。このように適正な論証手続きに基づいており、一貫性のある展開から結論が導かれている。したがって論理性は達成できている。

### 3. 厳格性

中国革命、明代の小説、中国古典などに題材をとった作品について、執筆にあたって武田が直接に典拠とした中国語資料および英語資料を博搜のうえ探り出し、そのうえで厳密な比較を試みている。草稿についても収蔵する資料館に赴いて直接確認して検討を加えている。関連資料をきちんと渉猟咀嚼しているし、証明資料・方法も厳格に用いられている。したがって厳格性は達成できている。

### 4. 発展性(選択的記述項目)

作品を典拠・草稿から比較するという手法によって、まだ分析できていない武田泰淳作品に検討の手を伸ばし、武田文学評そのものの刷新が期待できる。さらにはこの手法をもって、他の作家の検討も今後可能になるという可能性もある。したがって発展性は達成できている。

論文審査結果

合・否

審査委員 主査 (氏名) 木下 敏

(氏名) 有元 光彦

(氏名) 高橋 俊章

(氏名) \_\_\_\_\_

(氏名) \_\_\_\_\_